

昭和四年五月十日 印刷
昭和四年五月十三日 發行

有朋堂文庫
平家物語
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷者兼
發行者

三浦捷一

印刷所

有朋堂印刷所

發行所

有朋堂書店

不許複製製

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地

東京市神田區錦町三丁目九番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地

平家物語

〇劔つるぎの 卷なまき

十柄劔——太古の劔なり
十柄とは長劔の義なり
柄は握の意にて未尺度なかりし世には物を量るに幾握幾尋など稱したりきされど十握といひて必ずし

沛公者傳はいこう貴坊之屬きぼう鑣を切り白蛇之靈を得たり天帝出す名な始皇者取つて荆軻之七首を斷ち燕使之命を全うす聖明出で運を凡そ白髦黃鉞之德、弓馬矢石之勢、五戈之計、四義之品、皆是治國之術、保たも位之基也。尤可被賞とく飢者、刀劔之類也。抑日本に多くの劔あり。所謂寶劔、十柄劔、鬚切ひげまる、小鷗こがらすなり。鬚切膝丸と申す二の劔の由來を尋ねれば、人皇五十六代の帝をば、清和天皇とぞ申しける。皇子數多あまたまします。中にも第六の皇子をば、貞純親王、御子經基六孫王、其嫡子多田滿仲上野守、始めて賜源氏姓、可守護天下之由、勅宣をぞ蒙りてける。滿仲宣りたまひけるは、天下を守るべき者は、良き太刀を持たでは如何せんとして、鐵を集め鍛冶かじを召し、太刀を作らせて見給に、心に稱かなふ太刀なかりけり。如何いかすべきと思はれける處に、或者申す様、筑前國三笠郡土山といふ處にこそ、異朝より鐵くろかねの細工渡わたて數年候ふなれ。彼を召めるべく候ふやらんと申しければ、則すなはち彼を都に召し上のぼせ、太刀を

も字に拘は
るべからず
ただ幾つか
みもあるこ
とをいふ

細工—細工
人

多く作らせて見給へども、一も心に稱はず、空しく下るべきにてぞありける。彼鍛冶思ひけるは、我筑紫より遙々と召れし甲斐もなく罷下りなば、細工の名を失はんこそ心憂けれ。昔より今に至るまで、佛神に申す事の叶へばこそ、祈禱といふ事もあるらめとて、八幡宮に詣でつゝ、歸命頂禮八幡大菩薩、願くは意に稱ふ劔作り出させて與へ給へ、さやうならば、大菩薩の御器と罷成るべしと、願書を進らせて、至誠心にぞ祈りける。七日に満する夜の御示現にいはく、汝が申す所不便なり、疾く罷り出でて、六十日の際鐵を劔うて作れ、最上の劔二つ與ふべしと、分明に夢想ありけるが、細工悦びて、社頭を出にけり。其後よく金を鑲し劔ひ選びて、六十日に作りたり。實に最上の劔二つ作り出す。長二尺七寸、彼漢の高祖の三尺の劔ともいひつべし。滿仲大に悦びて、二の劔にて、有罪の者を切せて見給ふに、一の劔は鬚を加へて切りてければ、鬚切と名づけたり。一つをば膝を加へて切りければ、膝丸とぞ號しける。滿仲、鬚切膝丸二の劔を持ちて天下を守護し給ひけるに、靡かぬ本草もなかりけり。斯て嫡子攝津守賴光の代となりて、不思議様々多かりけり。中にも一の不思議には、天下に人多く失する事あり。死ても失せず、座敷に連りて集り居たる中に、立つとも見えず、出づるとも見えずして、搔消す

上一人―天子の御事

鐵輪云々―
頭上に鐵輪
をかぶりそ
の足に火を
燃すなり

様にぞ失せにける。行末も知らず、在所も聞えずありければ、怖しといふばかりなし。上一人より下萬民に至るまで、騒ぎ恐る事申すに及ばず。是を委しく尋ねれば、嵯峨天皇の御宇に、或公卿の娘、餘に嫉妬深うして、貴船の社に詣でて、七日籠りて申す様、歸命頂禮貴船大明神、願くは七日籠りたる験には、我を生きながら鬼神に成てたび給へ、妬しと思ひつる女、取殺さんとぞ祈りける。明神哀とや覺しけん、誠に申す所不便なり、實に鬼になりたくば、姿を改めて、宇治の河瀬に行きて、三七日漬れと示現あり。女房悦びて都に歸り、人なき處にたて籠りて、長なる髪をば五つに分け、五つの角にぞ造りける。顔には朱を指し、身には丹を塗り、鐵輪を戴きて、三つの足には松を燃し、續松を拵へて、兩方に火をつけて、口にくはへつゝ、夜更け人定りて後、大和大路へ走り出で、南を指して行きければ、頭より五つの火燃上り、眉太く、鐵漿にて、面赤く、身も赤ければ、さながら鬼形に異ならず。是を見る人、肝魂を失ひ倒れ伏し、死せずといふ事なかりけり。斯の如くして、宇治の河瀬に行きて、三七日漬りければ、貴船社の計にて、生きながら鬼となりぬ。宇治の橋姫とは是なるべし。さて妬しと思ふ女、其ゆかり、我をすさむ男の親類、境界、上下をも選ばず、男女をも嫌はず、思ふ様にぞ取り失ふ。男を

申の時一午後四時、下りば過ぎの意

守懸け一この時代の婦人は必ず守袋を胸にかけて歩行せり

取らんとては女に變じ、女を取らんとては男に變じて人をとる。京中の貴賤、申の時より下になりぬれば、人をも入れず、出づる事もなし。門を閉ぢてぞ侍りける。其比攝津守頼光の内に、綱、公時、貞道、末武とて、四天王を仕はれけり。中にも綱は、四天王の隨一なり。武藏國の美田といふ所にて生れたりければ、美田源次とぞ申しける。一條大宮なる所に、頼光聊用事ありければ、綱を使者に遣さる。夜隠に及びければ、鬚切を帶かせ、馬に乗せてぞ遣しける。彼處に行きて尋ね、問答して歸けるに、一條堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに、齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて、誠に姿幽なりけるが、紅梅の桂に守懸け、佩帶の袖に經持ちて、人も具せず、唯獨南へ向ひてぞ行きける。綱は橋の西のつめを過ぎけるを、はたくと叩きつゝ、やく何地へおはする人ぞ、我等は五條わたりに侍り、頻に夜深けておそろし、送りて給ひなんやと、馴しけに申しければ、綱は急ぎ馬より飛び下り、御馬に召され候へといひければ、悦しくこそといふ間に、綱は近く歩み寄て、女房をかき抱きて、馬に打乗せて、堀川の東のつめを南の方へ行きけるに、正親町へ、今一二段が程、打も出でぬ所にて、此女房後へ見むきて申しけるは、誠に五條わたりには、さしたる用も候はず、我住所は都の外に

安倍晴明—
有名なる陰
陽家也
たそがれ時
—夕がた

て候ふなり、それまで送りて給ひなんやと申しければ、承候ひぬ、何處までも御座所へ、送り進らせ候ふべしといふを聞きて、頓て厳しかりし姿を替へて、怖しけなる鬼に成りて、いざ我行く處は、愛宕山ぞといふまゝに、綱が髻を纏みて提けて、乾の方へぞ飛び行きける。綱は少しもさわがず、件の鬚切をさつと抜き、空ざまに鬼が手をふつと切る。綱は北野の社の、廻廊の屋の上にどうと落つ。鬼は手を切られながら、愛宕へぞ飛行く。さて綱は廻廊より跳り下りて、髻に附きたる鬼が手を取りて見れば、雪の貌に引替へて、黒き事限なし。白毛隙なく生繁り、銀の針を立てたるが如くなり。是を持ちて参りたりければ、頼光大に驚き給ひ、不思議の事なりと思ひ給ひ、晴明を召せとて、播磨守安倍晴明を召して、如何あるべきと問ひければ、綱は七日の暇を給りて慎むべし、鬼が手をば能々封じ置き給ふべし、祈禱には仁王經を講讀せらるべしと申ければ、其儘にぞ行はれける。既に六日と申しけるたそがれ時に、綱が宿所の門を叩く。何處よりと尋ねれば、綱が養母渡邊に在りけるが、上りたりとぞ答へける。かの養母と申すは、綱がためには伯母なり。人していふは、悪しき様に心得給ふ事もやとて、門の際まで立ち出でて、適々の御上にて候へども、七日の物忌にて候ふが、今日は六日になりぬ。

攝津守—賴
光

明日ばかりは、如何なる事候ふとも叶ふまじ。宿を召され候ふべし。明後日になりなば、入れ参らせ候ふべしと申しければ、母は是を聞きて、さめぐと打泣きて、力及ばぬ事どもなり。さりながら和殿を母が生み落しより請取りて、養ひそだてし志、如何ばかりと思ふらん。夜とて安く寝もせず、濡れたる所に我は臥し、乾ける所に和殿を置き、四つや五つになるまでは、荒き風にも當てじとして、いつか我子の成長して、人に勝れてよからんことを、見ばや聞かばやと思ひつゝ、夜晝願ひし甲斐ありて、攝津守殿御内には、美田源次といひつれば、肩を雙ぶる者もなし。上にも下にも譽られぬれば、悦とのみこそ思ひつれ。都鄙遼遠の路なれば、常に上ることもし。見ばや見えばやと、戀しと思ふこそ親子の中の歎なれ。此程打ち續き夢見も悪しく侍れば、覺束なく思はれて、渡邊より上りたれども、門の内へも入れられず、親とも思はれぬ我身の子と戀しきこそはかなけれ。綱は道理に責られて、門を開きて入れにけり。母は悦びて、來し方行く末の物語し、さて七日の齋といひつるは、何事にて在けるぞと問ひければ、隠すべき事ならねば、有のまゝにぞ語りける。母これを聞き、さては重き愼にてありけるぞや。さほどの事とも知らず、恨みけるこそ悔しけれ。さりながら親は守にてあるなれば、別

親は守—親

は守りの神
といふ諺、
時分諺留等
に見ゆ、親
は子の守護
神ぞと也

の事はよもあらじ。鬼の手といふなるは、如何なる物にてあるやらん、見ばやとこそ申されけれ。綱答へて曰く、易き事にて候へども、固く封じて侍れば、七日過ぎでは叶ふまじ。明日暮れて候はば、見参に入れ候ふべし。母の曰く、よし／＼さては見ずとも、事の闕べき事ならず。我は又此曉は、夜を籠めて下るべしと、恨顔に見えければ、封じたりつる鬼の手を取り出し、養母の前にぞ置きたりける。母打返々々之を見て、あなおそろしや、鬼の手といふものは、かゝる物にてありけるやといひて、さし置く様に、立さまに、是は吾手なれば、取るぞよといふまゝに、恐しけなる鬼になりて、空に上りて破風の下を蹴破りて、虚に光りて失せにけり。其よりして渡邊黨の屋造には、破風を立てず、東屋作にするとかや。綱は鬼に手を取返されて、七日の齋破るといふとも、仁王經の力に依りて、別の仔細なかりけり。此鬚切をば、鬼の手切りて後鬼丸と改名す。同年の夏のころ、頼光瘡病を仕出し、如何に落せども落ちず、後には毎日に發りけり。發りぬれば頭痛く、身ほとほり、天にも著かず地にもつかず、中にうかれて悩まれけり。かやうに逼迫する事、三十餘日にぞ及びける。或時又大事に發りて、少し減につきて、醒方になりければ、四天王の者共看病しけるも、皆閑所に入りて休みけり。

がばと一起
くる事の形
容

簀子—今い
ふ縁側

追ひ行く—
血痕を尋ね
て追ひ行く
惱さる—こ
そ—惱され
しこそとあ
るべきところ

頼光少し夜深方の事なれば、幽なる燭の影より、長七尺ばかりなる法師、するくくと歩み寄りて、繩をさばきて頼光につけんとす。頼光是に驚きてがばと起き、何者なれば、頼光に繩をばつけんとするぞ、悪き奴かなとて、枕に立て置れたる膝丸おつ取りて、はたと切る。四天王共聞きつけて、我もく々と走り寄り、何事にて候ふと申しければ、しかじかとぞ宣ける。燈臺の下を見ければ、血こほれたり。手々に火を炬して見れば、妻戸より簀子へ血こほれけり。此を追ひ行く程に、北野の後に大なる塚あり、彼塚へ入りたりければ、即ち塚を掘り崩して見る程に、四尺許なる山蜘蛛にてぞありける。搦めて参りたりければ、頼光安からざることかな、是ほどの奴に誑され、三十餘日悩さるゝこそ不思議なれ。大路に曝すべしとて、鐵の串に指し、河原に立てゝぞ置きける。是より膝丸をば、蜘蛛切とぞ號しける。頼光の代より、出羽守頼基の手にわたる。天喜五年頼光の弟、河内守頼信の嫡子、伊豫守頼義、奥州住人栗屋河次郎、安倍貞任、鳥海三郎、同宗任兄弟、謀叛の由其聞えありければ、彼討手に下さるゝ時、兼陸奥守になし、源氏重代の劔、鬼丸蜘蛛切、頼基が許に在りけるを、宣旨にて召し出され、頼義朝臣に賜ひてけり。頼基の曰く、此劔は、祖父多田満仲より三代相傳の寶なり、嫡々相承の劔に

しらけて—
意外なるに
おどろき興
さめたるを
云ふ、梅花
は知るまじ
とおもひ侮
りて行きし
にかゝる歌
をさへよみ

て候へば、争でか身をば放し候ふべきと申しけれども、御用ひなければ、力に及ばず出しけり。頼義是を賜りて、奥州に下向し、九箇年が間戦ひつゝ、終に軍にうち勝ち、貞任をば首を取り、宗任をば虜りて上洛す。貞任が長九尺五寸、宗任は遙に劣りて六尺四寸ぞありける。頼義の宿所に在りけるを、卿相雲客達、吾妻の夷、さこそはをかしく侍らめ。いざ行きて笑はんとて、梅花を一枝手折りて、宗任是は如何にと問ひければ、宗任取りあへず、

我國の梅の花とは見たれども大宮人はいかゞいふらん

と申したりければ、皆しらけてぞ還りける。さて宗任は筑紫へ流されたりけるが、子孫繁昌して今にあり。松浦黨とは是なり。鬼丸蜘蛛切二の劔をば、頼義朝臣より、嫡子八幡太郎義家に譲りけり。爰に出羽國、山北、金澤城に楯籠りたる武衡宗衡、謀叛の由聞えければ、國中の亂を静めんために、義家馳せむかふ。猛き兵なりければ、左右なく落ちず、三箇年に滅びにけり。頼義の九箇年の戦と、義家の三年の軍とを合せて、十二年の合戦とは申すなり。何も劔の徳に依りて、敵をば取りてけり。義家子供多くありけれども、嫡子對馬守義親は、出雲國にて謀叛の聞えあるに依りて、因幡守正盛を、追討の

出してこたへなければなり

山法師—叡山の法師

使に下されて、彼國にて討れぬ。二男河内判官義忠、三男式部大輔義國、是等にも譲らず、四男六條判官爲義譲り得たり。十四の年伯父美濃守義綱、謀叛の由風聞す。爲義討手にぞ下りける。義綱は甥の爲義向ふと聞きて、髻切り降に出でて上洛す。是も劔の用とぞ覺えける。又十八歳にて、南都の衆徒、朝家を恨み奉りて、數萬人の大勢、京へ攻め上りしを、爲義十六騎にて、栗子山に馳せ向ひ、追ひかへす。同く劔の用とぞ聞えける。其時山法師、一首の狂歌をぞ立てたりける。

奈良法師栗子山までしづりきていか物の具をむきぞとらるゝ

と詠みたりければ、奈良法師安からぬ事にして、いかにもこの答詠み返さんと、うちやすらふ處に、阿波の上座といふ者に術られて、山法師禁獄せらる。奈良法師、栗子山の答にぞ詠みたりける。

比叡法師あはの上座にはかられてきびしき獄につかれけるかな

とぞ詠みたりける。さて爲義は十四にて、伯父を虜にせし勸賞に、左近將監になされ、十八にて南都の衆徒を防ぎし恩忠に、兵衛尉になさる。廿八にて左衛門、三十九にて檢非違使になる。其後陸奥を望み申しければ、爲義がためには不吉なり、祖父頼義は九箇

別當―熊野
權現に仕ふ
るものの稱
不足とて：
：教眞別
當―此間蓋
脱文、古本
に、固辭し
申けれ共重
てひらに申
ければ押し
て別當にな
されけり教
眞是別當始
云々とあり

年の合戦し、親父義家は三箇年の軍をす。猶意趣残る國なりけり。爲義國司になりなば又國の狼藉出來せん。他國を賜はらんと仰ありければ、先祖の國を賜はざる者、受領しても何かせんとて、終に受領せざりけり。爲義は腹々に、男女四十六人あり。熊野にも女房あり。娘をば、たつたはらの女房とぞ申しける。白河院熊野御參詣の時、此山には別當ありやと御尋ありけるに、未だ候はずと申しければ、争かざる事あるべきとて、別當の器を尋ねらる。爰にうい黨、すゝきの黨と申すは、權現摩伽陀國より、我朝へ飛び渡り給ひし時、左右の翅となりて、渡りたりし者なり。依之熊野をば、我儘に管領して、又人なくぞふるまひける。折しも權現の御前に、花備へて籠りたる山伏を、別當になすべき由、すゝき計ひ申しければ、我身其器量不足とて、教眞別當の始なり。別當は重代すべき者なり、聖にて叶ふべからず、妻を合せよとて、誰かはあるべきと尋ぬるに、爲義が娘、たつたはらの女房、よかるべしとて、教眞にぞ合せける。爲義傳へ聞きて曰く、爲義が聲には、源平兩家の間に、弓箭に携はりて、秀でたらん者をこそと思ひつるに、諸寺諸山の別當執行といふことは、好きもあり惡しきもあり、行徳群に抜けぬれば、左様の官にも職にもなるとこそ聞け。行末も知らぬ者に、押へて合すらんこそ不思議なれと

甲斐々々し
き者―器量
あるものと
いふが如し

て、音信不通し、不孝の娘にてぞありける。抑爲義が傳へ持ちたる二の劔、終夜吼ゆ。鬼切吼えたる音は、獅子の音に似たり。蜘蛛切が吠えたる音は、蛇の泣くに似たり。故に鬼丸をば獅子の子と改名し、蜘蛛切をば吼丸とぞ號しける。かゝる處に、源平たてわけて、合戦あるべき由聞えたり、洛中騷動斜ならず。如何なる遠國深山の奥までも、聞えずといふ事なかりけり。教眞別當是を聞きて、我身は不孝の者なれども、かゝらん時力をも合せてこそ、不孝も許さるべけれとて、常住の客僧山内の惡黨等、上下を嫌はず催し立てて、一萬餘騎の勢にて都に上りけり。人々是を見て、是は如何なる人やらん、和泉紀伊國の間には、かやうの大名あるべしとも覺えずとて、委しく是をたづねれば、爲義の甥、熊野の別當教眞なり。舅の方人のためにとて、上りたるよいひければ、爲義も是を聞きて、氏種姓は知らねども、甲斐々々しき者なりけり。如何なる人の一門ぞと尋ねれば、實方中將の末孫なりと申しければ、さては爲義が下すべき人にはあらざりけり。今まで對面せざりけるこそ愚なれとて、請じ寄せ、始めて對面す。志のあまりにや、重代一具の劔を取分けて、吼丸を聲引出物にぞしたりける。教眞別當此劔を得て、是は源氏重代の劔なり、教眞が持つべきにあらずとて、權現に進らせけり。さて爲義一

具に持ちたりける劔を、一つ失ひて、片手のなき様に覚えければ、播磨國より好き鍛冶を召し上せ、獅子の子を本にして、少しも違へず造らる。最上の劔なりければ、悦び給ふ事限なし。目貫に烏を作り入れたれば、小烏とぞ名づけたる。爲義は獅子の子小烏とて、一具して祕藏しけるが、今の小烏二分ばかり長かりけり。或時二の劔を抜きて、障子に寄せかけて置かれたりけるが、人もさはらぬに、からからと倒るゝ音聞えければ、如何に劔こそ轉びぬれ、損じやしつらんとて、取寄せて見給へば、日來は二分許長しと思ひつる小烏が、獅子の子と同じ様にぞなりにける。不思議かな、さるべきやうやある、截れたるか、折たるかとて先を見れども、截れも折れもせざりけり。怪みて柄を見るに、目貫折れてなかりけり。抜きて是を見れば、柄の中二分ばかり新しく切りて、目貫を突抜きて、さがりたりと見えたり。是は一定獅子の子が切りたるよと心得て、獅子の子を改名して、友切と名づけたり。其後我年闌け齡衰へたり。今は劔持ちて何かせんとして、彼友切小烏二の劔を、嫡子下野守義朝にぞ譲られける。かゝりし程に、保元の合戦出で來たり。義朝は内裏へ召され、爲義は院の御所へ召され、子供六人相具して、院の御所へぞ参りける。保元の年七月十一日、寅の刻に軍始りて、辰の時には軍はててけり。唯

天台山―比叡山

三時に軍破れて、新院しんゐん負け給ふ。其時爲義は、天台山に馳せ登り、出家し、義法房とぞ名づけにける。子なればよも見放たじとて、義朝が許へ下りたりけれども、朝敵なれば叶はず、頓て義朝承りて、切りにしこそ無慙むざんなれ。義朝保元の勸賞けんじやうには左馬頭さまのかみになりけり。舍弟しやてい六人召し出され、五人は切れぬ。爲朝一人は落ちたりけるが、程を経て、九州田根たねといふ所より召し出されて、伊豆國へ流されけり。終には是も斬られにけり。子供四人も斬られぬ。義朝ばかり残りたりけれども、平治元年に、悪右衛門督あくゝゑもんのかみ信頼のぶよりに語らはれて、謀叛むほんを起し、子供多く持ちたりしかども、三男右兵衛佐頼朝うひやうゑのすけよりともとて、十三になりけるを、末代の大将とや見給ひけん、殊にもてあそばれ、生絹すゐしといふ鎧よろいを著せ、友切ともきりといふ劔はか帶はかせ、先に打立うちたててけり。されども朝敵なればにや、軍に打負けて、義朝は都を落ちて、西近江比良にしちふみひらといふ所に留りて、終夜八幡大菩薩をぞ恨み奉りける。昔は此劔つるぎを以て敵を攻めしに、靡かぬ本草もなかりしに、世の末になりて、劔つるぎの精せいも失せぬるにや、大菩薩も捨てさせ給ひたるか、是程に軍にもろく負くべしとこそ覺えね。義朝が祖父義家は、八幡大菩薩の御子として、八幡太郎と名を得たり。七代までは争いかにか捨て給ふべき。義朝までは三代なりとて、まどろみたる御示現に曰く、我汝を棄つるにあらず、持

馬眠―馬の上にてうた
たれするを
云ふ

惡源太―義
平

つ所の友切といふ劔は、滿仲が時俄に與へし劔なり、鬚切、膝丸とて、始のまゝにてあらば、劔の用も失すまじきを、次第に名をつけ替るに依りて、劔の精も弱きなり。故さら友切といふ名を附られて、敵をば隨へずして、友切となりたるなり。保元に爲義が斬られ、子供皆滅されしも、友切といふ名の故なり。今般軍に負けしも、友切といふ劔の名の科なれば、全く我を恨むべからず。昔の名に反したらば、末はあるべしと、分明に御示現ありければ、義朝覺めて、誠にあさましくぞ覺えける。此事を承るに、惡しく附られたりけるものかな。さては昔にかへすべしとて、鬚切とぞなされにける。さて比良を立ちて、高島を通りけるに、頼朝馬眠して、父に追ひ後れたり。其邊の者ども、七八十人馳合せて、虜らんとしたりけるに、頼朝打ち驚きて、鬚切を抜きて打ち拂ひければ、疵を被る者もあり、又死する者も多かりけり。鬚切に歸る驗とぞ覺えける。其夜は鹽津庄司が許に宿して、夜半ばかりに道しるべを得て、東江州へ移りにけり。藤川不破關も塞りて、京より討手の下ると聞えければ、義朝は雪の山に分入りにけり。頼朝少き身なれば、大雪を分難くて、山口に留りにけり。惡源太はひとり離れて、飛驒國へ落ちぬ。義朝は朝長ばかりを相具して、美濃國青墓の遊君が許に留りて、浦傳して、尾張